

# 日吉台地下壕保存の会会報

第77号

日吉台地下壕保存の会

年頭にあたって

日吉台地下壕保存の会会長 大西 章

日吉台地下壕保存の会員の皆様あけましておめでとうございます。本年も地下壕保存の会の活動のご支援をよろしくお祈いします。

本会は1989年4月に発足してこの4月で18年目に入ります。その間いろいろな活動をして参りましたが昨年度は大きな2つの出来事がありました。それは港北区などが主催する「ふるさとサポート事業」への参加と神奈川新聞の神奈川地域社会事業賞受賞です。

「ふるさとサポート事業」の参加については、公募という形ですが行政がこの活動を認めました。そこでわれわれは2つの新しい企画を掲げました。1つ目は見学会のガイドの養成です。そのためにガイド養成講座を企画し幅広く募集しましたら、毎回40名以上の方が講座に出席していただいています。新たなメンバーがガイドをしてくれることを楽しみにしています。もう1つは小学生にもわかるガイドブックの作成です。苦労もありましたがほぼ出来上がりました。地域の小学校などに無料配布などが出来そうです。われわれの活動の1つの目的である若い人たちへのアプローチと地域と密着した活動が大きく幅広く前進して、実を結びつつあります。

神奈川地域社会事業賞の受賞は神奈川新聞がこの16年間の地道に続けた活動を評価したことによります。本会は主に十数名足らずの運営委員が中心にボランティアで運営を行ってきました。仕事の合間をぬって年間40回以上見学会のガイドをしてくれる方、仕事が終わってから会報の作製・発送業務に駆けつけてくれる方など様々な人達の努力で続けられてきました。その意味でこの賞は一つの御褒美だと私は思います。本当にありがたく頂きました。しかし、それに終わらせずに、このことをバネに新たに活動を活性化し地域に貢献していかなくては受賞の意味が半減してしまいます。

まだまだ、世界に戦争はなくなりません。戦争の悲惨さを訴え続けなければまた逆戻りをする気配も感じます。まだ『日吉台地下壕』に戦争を体験した『モノ』として語ってもらわなければなりません。多くの人達に語り続ける『日吉台地下壕』をこれからもサポートしていきたいと思ひます。皆様のご支援・ご協力をお願いします。

### 第18回神奈川地域社会事業賞受賞の報告

#### 第18回神奈川地域社会事業賞表彰式に5名の代表が参列し受賞

日吉台地下壕保存の会では、第18回神奈川地域社会事業賞(主催・神奈川新聞社、神奈川新聞厚生事業団)を受賞した旨、第76号会報にてお知らせいたしましたが、さる10月22日、パンパシフィックホテル(横浜市西区)において表彰式が行われ、本会から5名の代表が参列して受賞してまいりました。

神奈川新聞社社長から永年の活動をねぎらう言葉と激励の挨拶があり、賞状と副賞が授与されました。受賞団体からのお礼の言葉、選考委員からの審査総評があり、記念撮影の後懇親パーティーが行われ散会しました。

日吉台地下壕保存の会では、これからも地域に根ざした戦争遺跡の調査・研究・保存運動、そして小学校をはじめ広く一般市民への見学会を通して社会に貢献していきたい所存でありますので、引き続きまして会員皆様のご支援下さいますようお願い申し上げます。

10月23日  
日曜日  
2005年(平成17年)  
神奈川新聞社  
第22754号

# 神奈川新聞

〒231-8446 横浜市中区太田町2-23 ☎ 045(227)1111 総合受付

## 郷土への思いを 地域社会事業賞、5団体を表彰

第18回神奈川地域社会事業賞へ、主権と運営  
新聞社、神奈川新聞厚生  
文化事業団)の表彰式が  
二十日、パンパシフ  
ックホテル(横浜市西区  
みなとみらい)で開かれ  
た。

受賞は福祉、環境、町  
づくり、国際交流などの  
分野で、多年にわたって  
地域貢献に取り組む市民  
団体に贈られる。

表彰式には、五団体の  
代表者ら約三十人が出  
席。稲村隆 神奈川新聞  
局長から、賞状と副賞  
を授与した。稲村局長は、  
「受賞団体は以下の通  
り、伊勢原市なんばの  
会、鎌倉を美しくする会  
▽かわさき自衛調査団▽  
相模原市16区映画研究会  
▽日吉台地下壕(ごう)  
保存会

長く地域に根ざした活  
動を続けらるる団体に贈  
られた。第18回神奈川  
地域社会事業賞の表  
彰式は、パンパシフィッ  
クホテル横浜



賞状を受け取る新井揆博氏



記念写真(前列 運営委員)

## 港北区ふるさとサポート事業 中間報告

# 着実に好評裡に進行中

日吉台地下壕保存の会は、昨年港北区のふるさとサポート事業に応募、助成金を受けて、今年度新たに

①ガイド養成講座(今年度5回で次年度につなげる。)

②日吉の戦争遺跡のやさしい「ガイドブック」づくり

二つの事業に取り組んできました。どちらの事業もいろいろな課題を持ちながらも、着実に進行しています。

## ◎ 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

～戦争遺跡を歩いて平和の語り部となろう～

日吉の戦争遺跡について深く知り、考え、案内できるガイドをめざす養成講座は下記の日程で、すでに第1回から第3回まで行われました。ふるサポの予算で、千枚のチラシを作り、区内各公共施設などに置かせていただき、また会報でもお知らせいたしました。戦後60年節目の年ということもあってか幸い反響は上々で、第1回は会場一杯正に老若男女、高校生から戦争体験をされた方々まで約60人からのご参加を頂きました。

★ 第1回 10月22日(土) 13:30～16:00

講演「戦後60年、アジア太平洋戦争をどう考えるか」

講師 渡辺賢二(明治大学講師)

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎

講師の渡辺先生は元法政二高で歴史の教鞭をふるわれ、また生田にあった陸軍登戸研究所の研究ではこの人をおいて語れないという方です。

講演はレジュメにもとづき

1. 今から60年前のアジア・世界・日本
2. 戦争の呼称をめぐって
3. 今、アジア太平洋戦争を振り返る意味
4. 戦後史の出発から見るアジア太平洋戦争の結末

4つの標題に従って、コツコツと説得力のある語り口で展開されました。今から60年前の日本を世界の動きの中で見る。終戦の時の連合軍、中国、朝鮮、ベトナム、インドネシアの動向はどうだったのか、詳細な資料にもとづき、説明される内容は、ともすれば日本での終戦しか語られず、考えなかった傾向に対し新鮮な問題提起となりました。また去年は国連の成立からも60年目に当たり、国連の特徴と問題点についても指摘され、世界の歴史の流れの中でアジア太平洋戦争と終戦を見る重要性を説かれました。戦争の呼称については大東亜戦争から15年戦争、太平洋戦争と様々な呼称がある中で真珠湾と共にマレー半島攻撃から始まったことから「アジア太平洋戦争」と呼ぶべきとされました。今、アジア太平洋戦争を振り返る意味については、植民地支配、大陸「侵略」に対する韓国、台湾、中国からの問いかけに対し、具体的事実で歴史を検証していく重要性を語られました。そして実際に研究されてこられた登戸研究所で開発された偽札と731部隊が使った濾過筒の実物を示され、あの戦争が侵略以外の何ものでもなかったことを事実で明らかにされました。

戦後史の出発から見るアジア太平洋戦争の結末については、ポツダム宣言の受諾から、アメリカの単独占領、米国の国益が追求され、日本の為政者との妥協により、戦犯が免訴されていく過程について話され、民主主義の復活と「逆コース」というダブル・スタンダードの中での日本国憲法体制について指摘されました。戦後60年、世界史の中でアジア太平洋戦争を位置づけようとするこの講演は、ガイド養成の入門講座を超えて、時代の本質について語られたも

のだったと思います。IT時代の21世紀には通用しないといわれる自国中心の歴史でしかあの戦争を語れない人々にも是非聴かせたい内容でした。

なお当日は神奈川地域社会事業賞の受賞式典の当日と重なり、保存の会が受賞した賞状と記念品が参加者に披露されました。

(谷藤基夫)

★第2回 11月19日(土) 13:30~16:00

学習「日吉の戦争遺跡」

- ① 連合艦隊地下壕をはじめとする海軍施設 (新井揆博)
- ② 日吉の空襲と学童疎開 (喜田美登里)
- ③ 大聖院と小嶋萬助 (亀岡敦子)

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎

第二回の養成講座は去る11月19日(土)の午後慶應義塾大学の来往舎で開催されました。今回も前回同様、30名の定員を大きく上回る参加者があり、また、内容的にも3名の保存の会運営委員から講義がなされ、充実した講座となりました。

講座の中味としては、まず、一番目の講義は、「連合艦隊司令部地下壕を初めとする海軍施設」というテーマで新井揆博からなされました。内容としては、近代遺跡の定義から始まり、戦争遺跡と戦争資料の種類 また、それとの関係でこれから日吉台の戦争遺跡を学習するにあたっての参考文献が紹介されました。特に当面学習に必要な入門的資料として、「戦争を歩くみるふれる」教育史料出版会(2001年)、「戦争遺跡から学ぶ」岩波ジュニア新書 岩波書店(2003年)、「保存版ガイド 日本の戦争遺跡」平凡社新書 平凡社(2004年)などがあげられました。つづいて、日吉にある戦争遺跡の特長として、陸に上がった連合艦隊指令部や海軍軍令部三部が慶應義塾日吉の大学キャンパスと地下壕に入っていたこと、また、箕輪には特攻兵器の開発・整備に傾注していた艦政本部の地下壕が建設されたこと、さらに、その結果として(連合艦隊司令部が入っていたという特定がなされていないとしても)、米軍による空襲がなされ、これらの軍事施設周辺地域がひどい空襲にさらされたことなどがあげられた。最後に、第3回目以後のフィールドに出での講座を考え、戦争遺跡を実際に歩き見学する時の基本的な心構えとも言ふべきことが話されました。



新井揆博氏

2番目としては、「日吉の空襲と学童疎開」というテーマで喜田美登里から講義がなされました。まず、空襲にしる疎開にしる全体的に残存している資料が非常に少なく実態を明らかにしていくことの困難さが指摘された。その上で、三度にわたるこの地域に対する空襲の実態、人事局功績調査部に接収された日吉台小学校の疎開の実情などを中心に報告がなされました。

最後の講義として、「日吉の住民と戦争—戦争に対する抵抗—、小嶋萬助(竹橋事件)と上原良司(特攻隊員)」とい



喜田美登里氏

うテーマで亀岡敦子から講義がなされました。この講義は、テーマにもありますように戦争に対する抵抗という観点からなされました。竹橋事件とは明治初頭、軍隊内の不平等や人民の困窮した生活苦を訴えるために起された近衛砲兵大隊200名の反乱であり、その結果53名の兵士が銃殺刑に処せられ、それなるがゆえに戦前日本史から抹殺された事件であった。(戦後においてもあまり知られていない)この事件の首謀者の1人であった小嶋は箕輪村出身であり、この地に葬られている。また、上原良司は慶應義塾出身の特攻隊員であり、45年に沖縄への特攻で戦死している。この戦争に対する批判的意思を内在している貴重な「所感」と「遺書」についての報告がなされました。



亀岡敦子氏

以上の報告を受け受講生からの質疑、講師からの補足がなされました。受講生からの質疑・意見としては、日吉台が選定された理由、軍令部の情報部と作戦部と実戦部隊との関係、艦政本部の機能について、また、日吉に配置された部隊の規模、などなどの質問、また、保存を国家的事業として行うべきではないかという意見が出されました。

それらに対して講師の方からから補足説明がなされました。日吉に連合艦隊司令部が置かれた理由としては、日吉以外にも三箇所候補地があったが、慶應義塾の施設がそのまま転用できること、電波の受信・送信に適した地形にあること、また、霞ヶ関と横須賀の中間点にあり地理的にも日吉台が最も適合していたとの説明、情報の問題については、戦争後半になると軍令部と連合艦隊司令部などの実戦部隊が直に情報交換していたこと、また、保存運動における国の関与については、文化財保護法の改正によって近代軍事遺跡も対象となるようになり、日吉台の軍事遺跡も文化庁によって文化財指定のための調査対象に選ばれやっとな端緒についていることなどの補足がなされました。

最後に、第3回の講座が日吉台地下壕でのフィールドワークであることなどの予告、また、そのための準備と諸注意がなされ第3回講座は終了しました。(茂呂)

★第3回 12月10日(土) 「日吉の戦争遺跡を歩く」(その1) 13:30~16:00  
連合艦隊日吉台地下壕を歩く  
慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎

第3回はフィールドワークとして日吉台地下壕の見学が約40名の参加で行われました。始めに新井本会副会長から日吉台地下壕の概略について話を聴き、これまで2回の講演で学んだことを確認したのち、2つのグループに分かれて、茂呂、谷藤2名の運営委員の案内で地下壕及び地上の戦争遺跡を回り、来往舎に戻ってまとめを行いました。

地下壕の見学が初めての方と2回以上見学された方の割合は半々ということでしたが、銀杏の落ち葉を踏みしめながら、熱心に話を聴き、集中した見学会でした。

★ 今後の見学会は下記の通り実施される予定です。ご参加をお待ちいたしております。

第4回 1月14日(土) 「日吉の戦争遺跡を歩く」(その2) 箕輪方面  
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎集合 13:30~16:00

第5回 2月18日(土)  
「日吉の戦争遺跡を通して私達が子どもたち・市民に伝えたいもの」  
慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎 13:30~16:00

## ◎ 日吉の戦争遺跡のやさしい「ガイドブック」づくり

ガイド・ブックについては、編集作業も終わり、1月末には発行予定です。お待ち下さい。



新ガイドブック表紙

## 投稿

## 日吉の思い出

小嶋 喜代子

平成17年10月22日、私は60年ぶりに日吉を訪ねました。日吉の駅や慶應内の建物は新しくなっていました。地形や並木は全く変わりなく、坂を登って行ってグラウンドを眺めた時は思わず懐かしさに涙があふれてしまいました。

昭和19年4月私共都立第三高等女学校高等科の学生約60名は、学徒動員令に従い、霞ヶ関の海軍省人事局に配置されました。私はその中の航空配員という所で予備学生13期14期当時少尉の人達の人事に携わりました。日本中の海軍航空隊に要員を派遣する仕事です。仕事内容は決して他人に漏らしてはならないと言われておりましたので多言せずにおりましたが、どの航空隊にも飛行機が殆ど無いので驚きました。

霞ヶ関が空襲されそうになったので同年12月に日吉の予科の建物に移りました。大変立派な建物で水洗トイレは勿論でしたが、洋風便器だったので使い方が分からず殆どすぐにつまらせてしまいました。また暖房は一切無く寒くて手がかじかみ手袋をしたままペンを取っていました。昼休みに日向ぼっこをするのが只一つの暖をとる手段でした。

軍令部が近くにあり士官の方(海軍では将校とは言いません)が皆モダンでその頃皆坊主頭のはずでしたのに長髪でいつも英語で話され長いマフラーを翻して歩いている姿をよく目にしました。

その後日吉も危なくなり、人事局は大船の観音様の地下壕に移りました。私は家の近くの海軍大学校に移り、終戦を迎えました。

8月15日の暑い中で秘密書類を泣きながら燃やしました。その時米兵が来たら飲むように白い粉を貰いました。父に見せたら、とんでもない、すぐに捨てろと言われました。そのお陰で今日の私があるのかも知れません。

当時私の上官であった海軍主計大尉小嶋建二(慶應大学経済学部昭和18年9月卒業)は後に私の夫となりましたが、平成17年4月85歳にて亡くなりました。

私の戦争記憶も遙か彼方となった感が致します。

昭和20年3月26日 卒業を前に日吉で撮った写真を同封いたします。前列の左から三人目が私です。当時はフィルムが手に入り難く、これは海軍の方が撮ってくださったものです。



## 投稿

戦中・戦後の私の学生生活 (最終回)

柳屋 良博 (元慶應義塾大学日吉情報センター副所長)

紙面の都合で掲載がおくれ申し訳ございません。73号の続きです。最終回は編集の都合上、割愛させていただいた部分がありますことをお詫びいたします。柳屋様には、貴重な記録をお寄せいただき厚くお礼申し上げます。長い間ありがとうございました。

**○昭和21年度．．．大学予科3年**

昭和20年5月予科二年で罹災して帰山（山口県）、入隊・復員と人並みの体験をした。

在京の親戚や知人もなく、空襲による惨禍で下宿などあるはずもなかった。それでもL組の友人に下宿探しを依頼し、「復学を願っている者がいることを忘れないでほしい」と訴える手紙を書いた。そのお陰か突然友人から電報を貰い、昭和21年10月上旬、21日に予科三年に進級するための追試験を受けた。三ノ橋の予科校舎（港区新堀町7）事務室に出頭すると、日吉の空襲と撤収で学籍簿が焼けたとかで所属学部・氏名などの自己申告をさせられ、英語・仏語・数学の試験を受け、他の科目はレポートとして山口から送付することになった。山崎福二先生が対応してくださったように思う。下宿先はなく28日には帰郷するほかなかった。

入学時には二年制の大学予科であったが、敗戦によって予科は三年制に戻った。勤労働員と入隊だけで終わった予科二年だったので、三年に進級するために試験が必要とされたのだ。しかし三年になっても一日も出席していないので、21年度は原級に止まり、22年度に改めてもう一度三年生としての勉学を続けることになった。

京浜線の川崎駅と東京駅間の海側を見渡すと、一面瓦礫の山の焼野原であって、復学は果たすことができるとしても、下宿探しとなると困難の極みであった。食糧事情は最悪で、お米を月ごとにいくらか用意すればと言われても、農家ではない私には打つ手立てがなかった。学業を続けるには経済上の問題が大きく、八方塞がりだった。

入隊時までクラス担任だった一ノ瀬先生に下宿問題をお願いすると、21年2月には一度上京するよう勧められたこともあった。久里浜の海軍通信学校跡への塾一部の移転交渉、九段禁衛府の学生会館への変身、塾内での学生の福利・厚生部門の創設などをお知らせ頂いた。陸海軍の諸学校生徒には官公私立への無試験の編入が認められたが、私大予科生にはこの門戸は開かれず悶々の日々であった。

私は無収入のまま遊んでいるわけにも行かず、敗戦の翌年昭和21年5月から、母のついでで山口県地方世話部雇員に採用され、遺骨班に配属され庶務に従事した。敗戦までの連隊区司令部であり、外地からの復員兵によって持ち帰られた遺骨・遺品、戦没者名簿を受領してご位牌を作り、遺骨箱にお納めして白布に包み、県下各地で御遺族に伝達、靖国神社合祀を申請するなどが業務であった。しかし復学を果たすため、昭和22年3月退職した。

**○昭和22年度．．．大学予科三年（2回目）**

4月、大森の友人が寄留中の六畳玄関の間に、食事・部屋代なしで同居させてもらい、5月1日から二度目の予科三年生として登校した。

職業軍人だった父は、昭和19年初め南京を発ち、ダバオ方面に行くと言ったまま生死不明だった。敗戦の翌年2月南海派遣ラバウル第一集団本部、つまり捕虜収容所からの軍事郵便ハガキで生きていたことが分かり、21年5月突然復員し、一か月余り復員局嘱託として残務整理に従ったあと、公職追放で無収入となった。女学校を出たばかりの妹が銀行に勤め、現金収入を得た。郵便貯金からの教育費用の引き出しも在学証明書を見せての制限付きだった。私は学資が無くなれば退学する前提で復学を果たした。父は昭和24年12月に死去し、以後母の弟が母に小遣いを月1500円渡してくれ、間接的に私を補助してくれた。

とにかく予科卒業を取りあえずの目標として、三ノ橋の授業には真面目に出席した。教師の方も心得たもので、一年後輩の外国語の授業は戦争中の動員で行なえなかったらしく、かなり程度を下げているように思われた。予科を終了した段階で退学するかどうか、私にとっては

何よりの頭痛の種であった。

昭和23年2月、学生互助会という団体のあることを知り、御茶ノ水駅近くの本部事務所を訪ねてピーナツ売りをさせてもらうことになり、どうにか学部に進学して学業を続ける目安ができた。以後アルバイトは学生ピーナツ売り、アイスクャンデーの製造・販売、闇のコッペパン売り、リンゴ売り、鋳物工場での砂落としと続けた。

予科三年を修了したところで、一ノ瀬先生の好意で日本育英会奨学資金の申請をし、昭和23年8月に採用され、学部一年から卒業まで貸与された。家からの僅かな送金の他に、奨学資金とアルバイトによる現金収入がなければ、学業の継続などできるはずはなかった。

### ○昭和23年度．．．大学学部一年

学部入学式は昭和23年4月12日で、とりあえず進路を文学科フランス文学専攻に決めて、午前中は授業を聴講、午後はピーナツ売りに変身した。幻の門の前近くの外食券食堂で昼食をとって、事務所に出向き、割り当てられたその日の場所にダンボール一箱と簡易折り畳み式の台を持って出かけるのである。

そのうち東大の学生に誘われて東横線のガード下の板囲いの中で、アイスクャンデーの製造・販売に当たることになった。5月大森の下宿からここに移り、蛍友会と名乗って製造機の運転を始めた。市販されているサクサクとした歯応えのするアイスクャンデーが製造できず、砂糖の代わりにサッカリンやズルチン、あるいは澱粉を使ったりして苦勞した。夜遅くまで製造して冷凍庫を満杯にしておき、陽が上がって暑くなると近くの渋谷実践・青山学院などの学生が集まってくるので、彼女らにキャンデーを卸すのである。アイスクャンデーは秋風の訪れと共に売れなくなり、学生たちも徐々に姿を消し、私も昭和24年2月には大森の下宿に帰った。

### ○昭和24年度／25年度．．．大学学部二年／三年

旧制私立大学最後の学生として、昭和25年9月に卒業するまでの一年余は鋳物工場で砂落としに従事した。授業があれば午前中だけ聴講し、時間のある限り卒論の準備にも当たった。同室させてくれた友人は、函館に移ることになり、私は一人となった。

入学時から起算すれば本来昭和25年3月卒業のはずだったが、復学が一年遅れて昭和26年3月卒業予定のところ、学制改革により繰り上げで昭和25年9月末の卒業となった。翌年3月まで在籍することは認められたが、育英会の奨学資金が9月打ち切りと決まり、学業を続けることはできなかった。7月たまたま慶應義塾図書館の館員募集があり応募したが不合格。8月慶應義塾塾監局事務員募集に応募して、三田と日吉のそれぞれで面接を受けて採用され、9月11日から日吉事務室に出勤した。

教務課で研修を受けていたところ、日吉研究室開設の運びとかで、16日から図書館日吉分室事務室の片隅で教員用図書の整理に当たることになった。図書館側の指導を受けながら図書整理のにわか勉強をし、リンゴ箱に詰めて積み上げられていた図書（主体は旧予科図書室所蔵の和洋書）の登録・分類・装備を12月までに終えた。塾の給料は低く、昭和25年12月蒲田駅近くに転居し、六畳二人の相部屋で下宿生活を始めた。

昭和26年春休みには塾図書館方式による和書目録の作成に着手し、5月7日旧日吉寄宿舍の北寮に引越し、ここが大学教員の研究個室・書庫および事務室となり、15日日吉研究室が開室した。

### ○終わりに

この文を書くに当たり、六〇年前の日記帳をひもといてみた。山口中学時代の担任・武田義孝先生はベルリンオリンピックの体操の主将だったが、私が中学四年の頃結核で亡くなられた。先生は日記をつけることを奨励され、その影響を受けた。日記は戦争が激しくなってきたからは検閲を恐れて鉛筆書きにしたり、インク不足で粉末インクを水で溶いて使用したため、判読できないところがあった。しかし今回日付を書き入れることができたのは、この日記のお陰である。また、母もよく手紙をくれていたことが大変役に立った。今は亡き武田先生と母に感謝を奉げる。

# 神奈川県地域社会事業賞受賞 記念講演会及び記念パーティー

会報でもこれまでお知らせして参りましたように、本会は神奈川県地域社会事業賞を受賞いたしました。これも会員および地域の方々の16年間に及ぶ地道な活動が評価されたものと思います。

そこで会員の皆様方とともに今回の受賞を祝い、更なる活動の発展を祈念し、下記のように神奈川県地域社会事業賞受賞記念講演会とパーティーを開催いたします。

会員の皆さまには、万障お繰り合わせの上ご参加いただければ幸いです。

日吉台地下壕保存の会  
会長 大西 章

## 記

1. 日時 2006年1月28日(土) 午後4:00~7:00
2. 会場 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎  
講演 ; 来往舎2階中会議室 (4:00~4:45)  
パーティー ; 来往舎地下1階ファカルティールラウンジ (5:00~7:00)
3. 講演 「戦争遺跡保存運動の意義」講師 十菱駿武氏  
(山梨学院大学教授・戦争遺跡保存全国ネットワーク代表)
4. 会費 3千円(当日ご持参下さい)
5. 申込先 電話、FAX、または葉書で1月20日(金)までにお願ひします  
(人数の都合上予約を必ずお願ひします)

宛先 日吉台地下壕保存の会 運営委員 亀岡敦子  
住所 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15  
TEL&FAX 045-561-2758

※なお当日はお気軽に平服でお出で下さい。

以上

## ● 活動の記録 2005年9月～2006年1月

- 9/24 9月定例見学会 56名  
 9/30 第6回運営委員会 会報76号発送(慶應高校物理教室)  
 10/8 10月臨時見学会 56名(見学希望者多数のため)  
 10/11 神奈川県立高津高校8名  
 10/19 第7回運営委員会(日吉地区センター)  
 10/22 10月定例見学会 33名  
     第1回「日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」開催  
     講演「戦後60年、アジア太平洋戦争をどう考えるか」受講者41名(来往舎)  
 10/27 地下壕見学会 慶應高校3年40名  
 11/11 地下壕見学会 川崎市立西生田中学校1年40名  
 11/15 地下壕見学会 長崎県退職教職員等連絡協議会23名  
     第8回運営委員会(慶應高校物理教室)  
 11/19 第2回「日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」学習「日吉の戦争遺跡」46名(来往舎)  
 11/21 地下壕見学会 慶應大学白石会十期同窓会12名  
 11/23 「港北ふるさとポート事業」中間報告会(発表と意見交換16グループ参加)  
 11/25 地下壕見学会 日本サトラフ協会35名 港北区生涯学級「まーず」62名  
 11/26 11月定例見学会 45名  
 11/29 地下壕見学会 慶應高校3年40名 富士市自衛隊父兄会45名  
 12/9 地下壕見学会 横浜家庭裁判所調停委員OB・法政二高教員27名  
 12/10 地下壕見学会 第3回「日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」日吉の戦争遺跡を歩く  
     その1 40名  
 12/13 第9回運営委員会(慶應高校物理教室)  
 12/14 地下壕見学会 下田小学校6年生110名  
 12/17 12月定例見学会 28名  
 12/20 地下壕見学会 神奈川県民主医療機関連合会15名  
 12/26 地下壕見学会 洗足学園中・高校生27名  
     1月14日の「ガイド養成講座」フィールドワーク下見5名(箕輪界限)
- 予定  
 1/12 第10回運営委員会 会報77号発送(慶應高校物理教室)  
 1/14 第4回「日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」日吉の戦争遺跡を歩くその2  
 1/28 1月定例見学会 神奈川地域社会事業賞受賞記念講演会

▲定例見学会は毎月第4土曜日に行っています。なお日程が変わる場合もありますので必ず見学窓口に申し込んでください。(見学申込先 TEL&FAX045-562-0443 喜田)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758  
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443  
 ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上  
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921  
 代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会  
 日吉台地下壕保存の会運営委員会